

伊東静雄『春のいそぎ』考

——〈公〉への促しと〈わがいのち〉と——

青山学院大学教授

永藤 武

一

伊東静雄の第三詩集『春のいそぎ』が刊行されたのは、昭和十八年九月であった。処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』（十年十月）から八年、第二詩集『夏花』（十五年三月）から、三年程を経っていた。時に詩人は四十歳。

『わがひとに与ふる哀歌』には、「古き師と少なき友に献ず」との献辞があり、『夏花』には『ルバイヤット』からの引用のみが序詞として配されていたが、『春のいそぎ』にはそれらとやゝ趣きを異にした、長めの「自序」が記されている。

草蔭のかの鬱屈と翹望の衷情が、ひとたび、大詔を拝し皇軍の雄叫びをきいてあぢはつた海闊勇進の思は、自分とは自分流にわが子になりとも語り伝へたかつた。そこで、大詔渙発の前二年、後一年余の間に折にふれて書きおいたものを集めて、一冊をつくつたのである。

その草稿をととのへて、さて表題の選定に困じてゐた時、たまたま一友人に伴林光平が、

たが宿の春のいそぎかすみ売の重荷に添へし梅の一枝

の一首を示されて、ただちにそれによつて、「春のいそぎ」と題した。大東亜の春の設けの、せめては梅花一枝でありたいねがひは、蓋し今日わが国すべての詩人の祈念ではなからうか。(略)

と。そして、詩集の巻尾に配された一篇「誕生日の即興歌」は、次のようなものであった。

くらい 西の屋角に 鬚筋斗うつて そこいらに もつるる あの響 樹々の喚びと 警むる 草のしつしつ
よひ毎に 吹き出る風の けふいく夜 何処より来て ああにぎはしや わがいのち 生くるいはひ まあ子や
この父の為 灯さげて 折つて来い 隣家の ひと住まぬ 籬のうちの かの山茶花の枝 いや いや 闇のお
化けや 風の洞間声 それさへ 怖くないのなら 尤むるひとの あるものか 寧ろまあ子 こよひ わが祝ひ
に あの花のこころを 言はうなら「ああかくて 誰がために咲きつぐわれぞ」 さあ 折つておいで まあ子

なおこれに「自註」が付されて、『春のいそぎ』一巻は、閉じられている。すなわち「まあ子はわが女の子の愛称。私の誕生日は十二月十日。この頃、海から吹上ぐる西風烈しく、丘陵の斜面に在るわが家は動揺して、眠られぬ夜が屢々である。家の裏は、籬で隣家の大きな庭園がつづいてゐて、もう永くひとが住んでゐない。一坪の庭もない私は、暖い日にはよくこつそり侵入して、その荒れた草木の姿を写生する。」とある。

「誕生日の即興歌」は、『文芸五世紀』昭和十五年一月号に発表された作であった。『春のいそぎ』には二十八篇が収録されているが、巻末のこの一篇はその中で、最も初期の発表作である。もっとも人文書院刊『増補伊東静雄全集』の「作品年譜」によれば、収録作のうち初出掲載誌不明が四篇ある。ただしそれらは、内容からしておよその執筆時期の推定が可能であり、いずれも「誕生日の即興歌」よりは後の作であることは間違いないであろう。

二十八篇の内訳でみると、「自序」に明記された「大詔渙発」すなわち昭和十六年十二月八日以前の作が十三篇、その後の詠が十五篇からなる。詩集としての構成は比較的単純で、「大詔渙発」後の作が前半に、それ以前の各篇が一括して後半にと、二分して配置されている。わけて最も早い時期の「誕生日の即興歌」を巻末に据えたわけであるが、これは「昭和十八年四月」の期日を明記した「自序」と、確かに照応し合う内容を有している。

「一坪の庭もない」家に住む詩人は、冬、山茶花の咲く頃合いの誕生日を迎える季節、日毎に海から吹上げる「西風」に烈しく家が動揺して、眠られぬ夜を過ごしている。眠られぬままに、その「西風」を「ああにぎはしや わがいのち 生くるいはひ」と聞きとめながら、わが女の子に、「わが祝ひに」ひと住まぬ隣家の庭の山茶花をこそ折ってこいと語りかけようとする。山茶花のその花の意は、「ああかくて 誰がために 咲きつぐわれぞ」とされるのである。

散文詩風的一篇は、一見して説明的な淡々とした語り口調の作と映りかねない。「即興歌」との表題からしても、己れの誕生日に、ふとわいた感興のおもむくままに、さらりと書きとめた戯れ歌との感がしないでもない。しかし多少とも注意を傾けて読むなら、意外にも陰影の濃く深いものがあるようだ。詩集に占める位置からしても、あの「自序」と合わせ読むとき、ひときわの意味合いが現われてくるようなのである。

「ああにぎはしや わがいのち 生くるいはひ」と言い、「ああかくて 誰がために 咲きつぐわれぞ」と言う。繰返し「ああ」と詠われる口調は、だが、高調した響きを発してはいない。むしろ悲痛にも鬱屈した色合いを帯びているのである。海から烈しく吹く「西風」を自然描写とのみ受けとるのは、単純に過ぎよう。

秋の花々の絶えた冬の、己れの生誕の時節に、わずかに咲きつぐ山茶花——その冬へと咲き継ぐ意味を、伊東静雄は問う。「誰がために」と。「われぞ」との語調と相俟って、ここでの山茶花は詩人その人の「わがいのち」と一つになつていると見て間違いないまい。だが、この自問に、新たに応答するものはない。相も変わらず暗い家の西の角に

海からの風が吹きつけ、聞こえるものとしては、樹々の喚びと、雑草を分ける寂しい風音である。「ああにぎはしや」が、祝祭の賑わいではなく、わずらわしい喧騒の気味合いの優ったもの言いであるのは、言うまでもないだろう。「警むる 草のし、つし、つ」とは、解りにくい表現となっている。あるいは「警蹕」からの連想が働いていると見做してもよいかも知れない。ただしその草の音は、威ある響きではなく、やはりあくまでも寂々とした風情なのである。

「まあ子」に「灯さげて 折つて来い」と語りかけようとしていることからするなら、そのわが子が、「わがいのち 生くる」のは「誰がため」の答えの一つに入っていると解するのも不可能ではあるまい。が、それに尽きるのである。その衷情はしかし隠された「花のこころ」さながらに、明かされることなく鬱屈したままに、家外の「闇のお化け」の跋扈する「風の胸間声」を聞いている他はない。

そのように見てくるならば、この昭和十四年十二月の詩人の心情が、やがて「自序」の冒頭で、「草蔭のかの鬱屈と翹望の衷情」と表明されるに至った思いの中味を示していたと受取っても見当違いにはなるまい。そしてそれが「海闊勇進の思」に展開されたのが、二年後「ひとたび 大詔を拝し皇軍の雄叫びをきいて」であったと「自序」は記していた。ひとたび「海闊勇進の思」へと展べられた伊東静雄の衷情が、やがて詩人としてのどのような覚悟と祈念へと収斂されて行ったかは「自序」の後半に銘記されている。だがその問題に入る前になお、昭和十六年十二月八日までの詩人の思いのありかをや、詳しく辿る必要があるろう。「大詔渙発の前二年、後一年余の間」の作を、逆転させて前後に二分し配置した詩集の簡明な構成は、年毎にめぐり来る詩人の誕生日の二日前の、昭和十六年という一回限りの歳月の秋の重みを、瞭然と証ししてやまない。その秋に際会しての、詩人の展開と持続のさまを追究することが、この第三詩集を扱う上での欠かせない課題になると考えられる。

「誕生日の即興歌」の発表からは半年後の、十五年六月中旬と推定されている、池田勉宛書簡で、伊東静雄はこう記している。長文に及ぶが、興味深い内容なので引照したい。

「昨日はお見舞のお手紙有難うございました。(九十二字省略) いろいろのこと知りました。そしていよいよ明らかになつたことは則天去私といふことが大切といふことと、文学は決して直接、個人の生活と体験をのみ、土台としてはいけないといふ覚悟であります。それと同時に、各自の苦しみを我慢して公の仕事をして行く、人間のいとほしさをしみじみと感ずるのです。／あなたの今月の御文章、ほのぼのとしてゐて、いいと思ひました。よくわかりました。わたしはいま看病の傍ら、古い歌謡の本をよんでゐます。隆達や、地唄などです。これは自分の鎮魂のためと、自分の文学の模索のためであります。私はこのごろ他から題をあたへられて詩作つてみたい気持が濃厚です。これはせめてもの私の謙虚の表情でありませうか。」

というのであった。そしてこの後に、己れの近作「蛍」を記載している。「蛍」は、『天性』同年八月号に発表され、詩集では「誕生日の即興歌」から「小曲」一篇をはさんだ箇所、すなわち巻末から三篇目に収録された作である。

かすかに花のほひする

くらい茂みの庭の隅

つゆの霽れ間の夜の靄が

そこはかとなく動いてて

しづかなしづかな樹々の黒

今夜は犬もおとなしく

ことりともせぬ小舎の方

微温い空気をつたはつて

ただをりをりの汽車のふえ

道行くひとの咳や

それさへ親しい夜のけはひ

立木の闇にふはふはと

ふたつ三つ出た蛩かな

窓べにちかくよると見て

差しのばす手の指の間を

垂火逃げゆく檐のそら

思ひ出に似たもどかしさ

ちなみに、七月二十三日付で『天性』の大谷正雄宛葉書でこの詩稿を書き送った折には、「原稿、ずつと病院にありましたのでおられました。(略)御判読、よろしくお組み下さい。くるしいくるしいこの半歳でありました。」と付言している。

「蛩」一篇が、和泉式部の著名な一首「もの思へば沢のはたるもわが身よりあくがれ出る玉かとぞみる」に通う作であるのは、ことさら指摘するまでもあるまい。和歌創作における本歌取り技法の応用といった問題などではなく、飛び出でる蛩をわが魂もしくは人の魂と看取るのは、むしろ古来より馴染み深い感性として通底するのである。

一篇には、和泉式部の歌に比して、「あくがれ出る」との一種物狂おしいまでの情念ではなく、「かすかに」「そこはかとなく」「しづかなしづかな」「ふはふはと」等の語法にうかがえる、「もどかしさ」を感じながらも放心してし

まったかのような、安らぎとはまた異様な静謐さがただよっているようだ。わがもの思いをつきつめた果てに、なおわが魂を見て取って止まない執拗さではなく、「親しい夜のけはひ」に情感を融け込ませようとして何ものかを放下する気配がある。家内に病人をかかえ夜ごと病院につめるような事情もあって、「くるしいくるしい」日常生活の内から、自ら形をなすに至った吐息にも似た一篇との趣きが色濃い。

池田宛書簡の「則天去私」への言及には、この前に九十二字の省略のあるためだろうか、にわかには理解し難い唐突さを感じられる。漱石の晩年の境地を開示したものとされるこの語の真意については、なお慎重な検討の必要がある。従って漱石自身における「則天去私」の内実はしばらく置き、今、伊東静雄がこれを持出した意味合いについては、続く文面の中から読み取って行く他はあるまい。

詩人はそこで、「文学は決して直接、個人の生活と体験をのみ、土台としてはいけない」との覚悟の大切さを披瀝していた。もっともこれは、当人が「いよいよ明らかになつた」とことわっていたごとく、何もこの期に及んで初めていた。気付かされた覚悟のあり方というのでは決してない。処女詩集・第二詩集を読むなら、伊東静雄がこれまでも自身の「生活と体験をのみ、土台とした」、〈私小説〉ならぬ〈私詩〉めいた抒情詩を詠っていたのではないことは明白だからである。己れの私生活上の体験を思い出し、その事実関係をなぞり返しての感慨を表出してこと足れりとするような作を、詩人は残してはいなかった。その意味ではこれまでも、「私」を去って、あくまでも一つの作品世界として固有に自転し得る詩を創作して来たのであって、従来の詩作へのその覚悟のほどが、今日、いよいよ強固なものとなったことを伊東静雄は再確認しているのである。(なお処女詩集・第二詩集の詳細については拙稿「わがひととに与ふる哀歌」覚書「青山語文」第二十号、「伊東静雄」わがひととに与ふる哀歌——巻頭詩の読解への試み——「岡保生編『近代文芸新攷』新典社、「伊東静雄」わがひととに与ふる哀歌」序論——その構成と意味——「青山学院大学文学部」『紀要』第三十二号、「伊東静雄」わがひととに与ふる哀歌」の終曲」「青山語文」第二十二号、「伊東静雄」『夏花』の耀き」「青山学院大学文学部」『紀要』第三十三号を参照さ

りたい。」

ただし、これに続く「それと同時に」以下を読むとき、その間に微妙な転調を覚えたいではない。詩人は「各自の苦しみを我慢して公の仕事をして行く、人間のいとほしさをしみじみと感ずるのです。」と表白していた。ここの「公」とは、どのような含意の言葉として用いられているのか。〈私〉に対しての〈公〉には違いないだろうが、それが詩人の把握した「則天去私」の内実であると理解してしまうのは性急に過ぎるようだ。少なくとも「公」はこれまでの詩人の作品では、表立って用いられることのなかった言葉なのである。

「くるしいくるしいこの半歳でありました」と率直に表明していた伊東静雄は、しかしそれをここでは私生活の問題をも含めての己れ一個の特権的な苦悩としてではなく、人が誰しも抱え味わっているものとしての「各自の苦しみ」といった、いわば開かれ相対化された視野で捉えようとしている。「各自の苦しみ」自体はもとより、それぞれにまったく具体的で独自の内容に満ちており、比較も一般化も無意味であるに違いない。それでもなお人は皆、他人にあずけてしまうことはもちろん、それと伝え理解してもらおうことも出来ないような「苦しみ」を苦しんでいないわけはないと得心したなら、人間の生の普遍的なありようとして、相対化された視野がひらけるであろう。

各人はしかもその苦しみに埋没し打ち拉がれてしまうのではなく、これを耐え忍び「我慢」して、「公の仕事」に従事し遂行しようと思志し努める。強いられてやむなくてはなく、私ごとにのみ拘うことを超えての己れの生の意味をそれに求めようとするとも言えようが、伊東静雄はそこに「人間のいとほしさをしみじみと感ずる」という。

〈私〉と〈公〉と図式的に対置させると、やゝもすれば教条化された思考に走りかねない。例えば〈滅私奉公〉といった遍い文句のごとく、〈公〉を大義名分に掲げて他人を叱咤し、自らをも一途に駆立てるといった具合に。あるいはそれを逆転させての、〈公〉こそ〈私〉——個人の人権尊重、幸せの増進のために機能しなければならぬと主張することも、教条主義である点において同断である。伊東静雄の姿勢がそれと異質であるのは、「いとほしさ」

との言葉一つからも充分に観取できる。人間のそうした営み生き方に自らを仕向けて行く姿に、本然のありようを見てとり、そんな人間なるものに共鳴しつつ、切なくも恋人に寄せるかのような情の動きを感じてやまないもののように。かなしくもふびんでならないからこそ、愛着がいやまし、大切にせずにはいられない念がしみじみと湧いてくるのである。

何もそれは、〈公〉に埋没させることによって、己れの苦しみを超越しようとするのではない。私的苦しみなど、〈公〉の価値の前には無意味だというのでも、もちろんない。各人がひき受ける他に術のない「苦しみ」を、個性重や近代自我の確立といった名分の下に、あえてひけらかすお目出たさを恥じるところが死滅してはいないに過ぎないだろう。むしろ、こうした伊東静雄の「いとほしさ」は、己れの意志ではどうにもならない「わがいのち」なるものの手強さや怖ろしいまでの理不尽さを思い知った者にして、初めてしみじみと喚起されてくるものと言うべきかもしれない。

池田宛書簡の後半で、詩人は「古い歌謡の本」を読んでいる近況にふれ、それは「自分の鎮魂」と「自分の文学の模索」のためだと述べていた。「わがいのち」「誰がために咲きつぐわれぞ」との念いを強く深く自問していた伊東静雄が、家内の看病に疲れ、時に「差しのばす手の指の間を／垂火逃げゆく檐のそら／思ひ出に似たもどかしさ」を感じながら、己れの「鎮魂」の必要に促され、処女詩集・第二詩集の単なる延長や反復ではない何か新たな「文学の模索」に情熱を傾けていたさまが窺えるようだ。己が「鎮魂」と「文学の模索」とは別のことではない。大学卒業と同時に、伊東静雄が昭和四年四月来、公立中学校に国語教師として奉職してきた経歴からするなら、その十年余もまた「公の仕事」に携わった歳月と言われるべきであろう。が、詩人にとって、詩人として己れの「苦しみを我慢して公の仕事をして行く」とはどういうことか。「いとほしさをしみじみと感ずる」と表明していた詩人本人が、その問題に切実に心を寄せていなかったはずはあるまい。

これに対する否応のない一つの応答がやがてもたらされることを、このとき詩人は予覚していたかどうか——確かなことはむろん分らない。ただ、「自分の文学の模索」を述べたのに続けて、「私はこのごろ他から題をあたへられて詩作つてみたい気持が濃厚です。これはせめて私の謙虚の表情でありませうか。」と吐露していた言葉を想起するなら、何らの予覚も無しに「公」の言葉を記したとは考えられないのである。それは決して、社会情勢や外部世界の動向に対する観察・判断の結果からする処世術としてそうなって来たというのではない。詩人の内部——「わがいのち 生くる」念いに促され、自ら醸し出されてきたのであった。

詩人はやがて、いとおしみながら「わがいのち」の咲き継ぐ証とすべく「公の仕事」としての詩作を、己れの「苦しみを我慢」する意志の発露によって詠うであろう。しかしながらあの「自序」の後段に戻るまでには、更に幾篇かの、詩人が「文学を模索」しつつ己が魂の発してやまない「鬱屈と翹望の表情」を表出したと目される作を、瞥見しておかなければならない。

三

先ずは昭和十六年『文学界』四月号に発表された、「なかぞらのいづくより」である。

なかぞらのいづくより吹きくる風ならむ

わが家の屋根もひかりをらむ

ひそやかに音変ふるひねもすの風の潮や

春寒むのひゆる書齋に 書よむにあらず
物かくともあらず

新しき恋や得たるとふる妻の独り異しむ

思ひみよ 岩そそぐ垂水をはなれたる

去年こぞの朽葉は春の水ふくるる川に浮びて

いまかるき黄金きんのごとからむ

季節を特定すれば、早春を詠った一篇と言えよう。この作の殊に第三聯初行に、『万葉集』の志貴皇子の名高い一首「石ばしる垂水の上のさ蔭の萌え出づる春になりけるかも」の影響を指摘する向きがある。志貴皇子の一首は現在ではこのような読みにはぼ定着しているようだが、『古今六帖』や『和漢朗詠集』等で「いはそそくたるひ」とする形もあるから、伊東静雄があえてそれに拠った可能性も皆無とは言えない。しかし一篇全体、また第三聯のみでも、この作が志貴皇子の一首と趣きを異にしているのは明らかであり、季節的にはむしろ小学唱歌『早春譜』の「春は名みの風の寒さよ」によりいっそう近いと言うべきであろう。

この一篇に限らず、伊東静雄の諸篇をめぐって、その発想や語法語句に関し、出典や影響関係を指摘する考察がこれまで多くなされている。『わがひとに与ふる哀歌』の場合には、主として西洋の詩人や画家、そして『夏花』『春のいそぎ』においては、わが国の詩歌による「本歌取り」とでもいった問題への関心である。が、そうした点へのこだわりは、ややもすれば読者や研究者の学術的な自己満足にはなっても、伊東静雄の作品自体をよりよく理解し味わうためにはかえって妨げになるのではないか。日本語という言葉の使用には、もとよりある程度の知識量に基づく共通理解のための幅がなければならぬ。その共通項を明示することは難しいが、少なくとも伊東静雄が、例えば大学で国文学なりを専攻する者でもなければ必要ない知識を前提に、己れの詩を詠じているのではないことは明らかである。

従ってこの一篇に、今更のように志貴皇子の歌の影を見て取っても、さほど意味のあることは思えない。伊東静

雄が詠っているのは、「さ廠の萌え出づる春になりけるかも」との生命の萌え出した実感による躍動感ではない。万葉のこの一首には「石ばしる垂水の上の」と上の句がいかにも相応しいが、詩人が想像しているのはそれよりも早めの時節で、ようやく「垂水」が溶けて川の水量が増して来た頃合いである。「石ばしる垂水」一首が詞書にあるように陽春を迎えた「歎び」の歌であるのに対して、一篇は、冬が過ぎ春を迎えようとする「春は名のみ」把え難い季節の迫間で、詩人の心情の表現された作なのである。

初行「なかぞらのいづこより」は、その風の吹きくる源を求めようとして、判断中止した様を告げているようだ。何処から何の為に吹き下してくるのかは分らない。ただし詩人は、その風の吹き音の微妙な変調に、細心の注意を怠ってはいない。冬は過ぎ「家の屋根もひかりをらむ」春とはいえ、書斎には寒の冷えばかりが感じられてならない。詩人はその冷たさに身をひたし、読書するでもなく詩作するでもなく、ひとり籠って終日「風の潮」を聞いている。春の到来の時節に、なお冬籠りをしているかのような鬱屈がここにはあるが、しかし詩人は己れの思いに屈しているばかりではない。「思ひみよ」と、自身を鼓舞するような意志を発動しようとする。

「新しき恋や得たる」とでも言いたげな「ふる妻」のいぶかしみは、半ば当たっているが半ばは的をはずれている。新しい春を翹望する念いのみで詩人が想起しているのは、新たな生命力に満ちた早蕨の姿ではない。永くつららに閉ざされていた「去年の朽葉」が、水量の増した川面に、今まさに浮かぼうとするさまであった。このとき詩人は、その「朽葉」に自分の姿を見ていると言ってもよいかもしれない。「思ひみよ」「いまかろき黄金きんのごとからむ」は、想像裏の光景描写にとどまらない、詩人の再生への願望を秘めた心情の吐露でもあろう。

次に同じ十六年の『コギト』六月号に掲載された「山村遊行」。

しづかなる村に来れるかな 高きユーカーリ樹の

香ぐはしくしるき葉をひるがへせる風は

はやさくらの花を散らしをはり
枝にのこりてうす赤き霧のいろのゆかしや

迫れる山の斜面は 大いなる岩くづされてひかる見ゆ
その切石のはこばれし広き庭々に

しづかなる人らおのがじし物のかたちを刻みゐて
卯の花と山吹のはなと明るし

ふくれたる腹垂れしふぐり おもしろき獣のかたちも
ふたつ三つ立ちてあり

あゝいかにひさしき かかる村にぞかかる人らと
世をあり経なむわが夢

あゝいかにひさしき 黄いろき塵の舞ひあがる
巷かぢに辛かぢくいきづきて

あはれめや

わが歌は漠たる憤りとするどき悲しみをかくしたり

なづな花さける道たどりつつ

家の戸の口にはられしるしを見れば

若者らいさましくみ戦に出で立ちてここたくも命ちりける

手にふるるはな摘みゆきわがころなほかり

詩題にふさわしく、のびやかにゆったりとした詠い起こしに始まる一篇は、第一・二聯で、石工の里らしい花々に満ちた静かな山村の、明るい気配を伝えて来る。村人は広い庭々で各自それぞれに、寡黙に「物のかたちを刻み」続けている。その姿に、詩人の目は特にひかれたようだ。

一転して「あゝいかにひさしき」と反復されるに至る第三聯では、それに触発されて顕在化した詩人の積年の夢と現実とが、対句的に処理される。そして塵高い巷にやつのことで必死に生きてきた証しとして提示されるのが、「わが歌」であり、「漠たる憤りとするどき悲しみをかくした」その調べである。「あはれめや」は、もとより読者に訴えているのでも同情を求めているのではない。自分の歌が、何に由来し何に對するものかは分明でない憤りと一途にも貫き通すような悲しみを、どうしてもひそかに隠しもってしまう調べであることを、己れ自身で「あはれめ」と言うのである。そうした歌を自ら「あはれめ」と言う詩人はここで、いわば「しづかなる人らおのがじし物のかたちを刻みて／卯の花と山吹のはなと明るし」といった風の詩作を望んでいると観てもよいかもしれない。

これをうけての第四聯と結びの一行とは、第三聯の高揚を鎮め、詩人の心が自ずからある一つのことには収斂して行った趣きで展開する。わずかなの花咲く道を行きながら、詩人はやがて「いさましくみ戦に出で立ちてここたくも命ちりける」「若者ら」の証しを、その山里の家の戸口に見出す。それへの直接的な感慨は何ら記されることがない。一篇はやや唐突にも「手にふるるはな摘みゆきわがころなほかり」との一行をもって閉じられるのであるが、この一氣に言い放ったかのような息の長い一行に、詩人の感慨の行方は凝縮されているようだ。「あゝいかにひさしき」「あはれめや」と表白されていた感情の起伏が、ここにおいて終熄し、「わがころなほかり」という簡明なありさまを示

しているのである。

こうした直き心こそ、「漠たる憤りとするとき悲しみをかくした」詩を詠って来た伊東静雄が、はるかに欲しているものではなかったか。「山村遊行」の翌月に同じく『コギト』に発表した「庭の蝉」を読むと、しかしその直き心がやはりそうは持続しないことをも、同時に詩人は承知していたかのようである。

旅からかへつてみると

この庭にはこの庭の蝉が鳴いてゐる

おれはなにか詩のやうなものを

書きたく思ひ

紙をのべると

水のやうに平明な幾行もが出て来た

そして

おれは書かれたものをまへにして

不意にそれとはまるで異様な

一種せいぜん前生のおもひと

かすかな暈うらひをともしなふ吐気とで

蝉をきいてゐた

〈この庭にも〉でも、まして〈わが庭にも〉ではなく「この庭にはこの庭の蝉」とことわられているところに、書き出しから何やら屈託したものがあふくようだ。紙を展べたら、ことさら案じるまでもなく自ずから「出て来た」という「水のやうに平明な幾行も」は、直き心の名残りが書かせた「詩のやうなもの」ではなかったかと想像される。と

かく「物かくともあらず」引き籠りがちな伊東静雄に、こうした成り行きはまれであったに違いない。だからこ
まるで他人ごとのように「書かれたものをまへにして」、しばらく端座し続けたのであったろう。

そのとき詩人を、目の前の「平明な幾行」とは「まるで異様」な「おもひ」が襲ってくる。そして「暈ひをとまなふ吐気」を感じながら、現実にする念いで「蝉をきいてゐた」というのだろうか。あるいは「この庭の蝉」の鳴き声が、不意に詩人に「異様」な「おもひ」を喚起したのかも知れない。一篇の「そして」からの後半は、言いまわしに屈折した不自然さがあり、単純には理解しにくい。ただ、『わがひとに与ふる哀歌』『夏花』を見てきた目にはそれが、あの「田舎道にて」「行つて お前のその憂愁の深さのほどに」「いかなれば」「水中花」などに近いものであるのは明らかである。「一種前生のおもひ」というも、一種とことわられているように、輪廻転生思想の現われなどではあるまい。現実という、今このときの日常的な生の意識を超えたものの実感の表明と解される。

もっとも『春のいそぎ』にあって詩人はもはや、そこに深く入り込み執拗にも表現しようとはしない。「蝉をきいてゐた」と記すのみで一篇を閉じるのであった。ここには「平明」なものを求め、良しとしよとの配慮が働いていると見るべきであろう。「庭の蝉」から三月のち『天性』十月号に寄せた「羨望」の後半は、次のようなものである。「この剣道一段の受験生は／また詩人志望者でもあつたので／わたしはすこし揶揄ひたくなつた／『蝉の声がやかましいやうでは／所詮日本の詩人にはなれまいよ』／といふと何うとつたのか／かれはみるみる赤い羞しげな表情になつて／『でも——それが迎も耐らないものなのです』／とひとりごとのやうに言つた／そのいひ方には一種の感じがあつた／わたしは不思議なほど素直に／——それは 迎も耐らないものだつたらう／しんからさう思へてきた／そして 訳のわからぬうらやましい心持で／この若い友の顔をながめた」と。

内容と相俟って、まさに「不思議なほど素直に」「水のやうに平明な」書きぶりである。ややもすると評者はこうした作に、詩人の詩的世界の燃焼度の低下、気力の衰えを指摘して事足りれりとしがちである。が、今大切なのは、一

作の評価を安易に下すことではない。こうした作品が、平明な素直な表現をとの伊東静雄の念いの現われであることを、承知することなのである。

「大詔渙発」前の作に関しては、もう一篇だけ取りあげて終りにしたい。「夏の終」と題された一篇である。初出は不明ながら、この「夏」は昭和十六年の夏と見てよいのではないだろうか。

月の出にはまだ間があるらしかった

海上には幾重にもくらしい雲があつた

そして雲のないところどころはしらく光つてみえた

そこでは風と波とがはげしく揉み合つてゐた

それは風が無性に波をおひ立ててゐるとも

また波が身体を風にぶつつけてゐるともおもへた

掛茶屋のお内儀は疲れてゐるらしかった

その顔はま向きにくらい海をながめ入つてゐたが

それは呆やり牀几にすわつてゐるのだつた

同じやうに永い間わたしも呆やりすわつてゐた

わたしは疲れてゐるわけではなかつた

海に向つてしかし心はさうあるよりほかはなかつた

そんなことは皆どうでもよいのだった

ただある壮大なものが徐かに傾いてゐるのであつた

そしてときどき吹きつける砂が脚に痛かつた

これも素直にも平明な作と言ってよい一篇である。言葉の用い方、一篇の構成といった技巧においてそうであるばかりではない。何よりも己れ自身の心の働かせ方、心のあり方を平明・素直に整えようと仕向けている点において、そうなのである。

月の出にはなお間のあるらしい夕暮れの海辺の茶屋で、詩人はひとり時を過ごしている。一篇は、改行の形をとりながら、抒情詩というよりは散文的な表現を多用し、「——た」との叙述の積み重ねで展開されて行く。海上に目をやつた詩人に、幾重にも垂れこめた「くらい雲」とその切れ間に「しらく光つてみえた」波とのもつれ合うさまが映る。詩人はそれを、解釈しようと試みる。また視線を手元に移せば、そこには「くらい海にながめ入つて」「呆やり牀几にすわつてゐる」茶屋の内儀の姿がある。一見して眺め入る姿勢は保ちながらも、すでに海の暗さを注視する緊張感は微塵もない。と観察しつつ、その姿と同様の自分に、詩人はふと気付かされる。気付かされて驚き、やはり抗弁をしないではいられなくなる。「わたしは疲れてゐるわけではなかつた」ただ単に「海に向つてしかし心はさうあるよりほかはなかつた」のである。意識や意志を超えて、「さうあるよりほかはなかつた」心に直かにぶち当たり、そうと認知したこの言葉には、やはり真実味とそして名状し難い哀しみがこもっているようだ。あの「羨望」での若い友の「迎も耐らない」との言い方に、「一種の感じ」がこもっているのを感じ「不思議なほど素直に」共感したのと相通じる心の傾斜が、ここにはある。

伊東静雄はそれを確認した上で、だが、そこで意識の働きを停止しようとはしない。自然の光景の解釈や内儀の姿の観察や意味付け、まして己れの心のありようについての自己弁解などは——「そんなことは皆どうでもよいのだつ

た」との裁断を下し、言い切る。今このとき肝腎な唯一のことは「ある壮大なものが徐々に傾いてゐる」事実を歴然と観て取り、承知し、受け入れる以外はない、と。そのように思い返す単純さに、己れを仕向けようとするのである。

「徐々に傾いてゐる」「ある壮大なもの」とは何か。詮索の思いをさそつてやまないもの言いであり、様々な解釈なり付会なりを可能にする余地をはらんだ一行であるに違いない。が、性急にその「壮大なもの」の内実を論うことは、かえつて、詩人が感じ取り表現しようとしたものの得体の知れない律動を、弱め空疎化してしまうだけではないか。こうした際の解釈は、一見華やかに意味有り気に見えようと、原詩の前ではしよせん徒花に過ぎない。

ただし、一篇が「夏の終」と題されていたこと、しかも詩の本文ではこれといつて季節を明示する言葉が登場しない点には留意すべきかもしれない。もっとも、季語めいたものが見当たらないだけで、「風と波とがはげしく揉み合つてゐた」「吹きつける砂が脚に痛かつた」といった表現から、嵐のまえぶれめいた気象の様子は充分に窺える。とすれば、この強風は、夏の終りを決定付ける〈野分き〉ならぬ海から襲来する颱風に他ならないのである。やがて襲い来る颱風でひときわ激しく波立ち、雲と波とが争い荒れ狂うに違いない海に向かって、詩人は「呆やりすわつてゐる」しかない。しかしながら、「ある壮大なものが徐々に傾いてゐる」のだけは、紛うことなく観て取つていたのである。そのことは、「壮大なもの」とは比較にならない実に卑近な、しかし如実に「吹きつける砂が脚に痛かつた」と同様に、確かに自分が実感し痛感したことだったのである。そして詩人はそれを、得体の知れないままに、「ある」（或る何か）としか言えないものとして、ありのままに受けとめようとしている。

「ある壮大なもの」をのみ揚言するとき、ともすれば人は一種の運命論者になるのかもしれない。個人の思いや意志や努力の及び難い「壮大なもの」を認知し、その傾きに、ただそうあるよりほかはなかつたとして、己れを没入させることによって。伊東静雄の姿勢が、しかしそれとは異なっているのは、明らかである。伊東静雄の脚は、吹きつ

ける砂の痛みを感じないまでに麻痺してはいない。自分一個の身体が、微細な砂粒の痛みを鋭敏に感じないではいられないのと、全く同じ感受性と心の向き方によって立って、「ある壮大なもの」を認識し、その「徐かに傾いてゐる」動きを凝視し、行方を見定めようとする。己れの脚の痛みにかけて、他人事めかした高見の見物など不可能であるし、自らにとつてい許せないことを承知しているのは、詩人その人であつたに違いない。

四

昭和十八年九月十八日付、倉辻平治宛書簡で、伊東静雄は次のように記している。「夏花はもう売切れて、再版はしてゐません。陰鬱なものなので、その気持もありません。春のいそぎ（正月の用意といふ意味）は旬日中に発売する筈であります。これが自分の最後の詩集になるのぢやないかと考へます。そしていくらか、自分のものでは、いい出来の方ぢやないかと考へてゐるのですが。」と。

ここでの物言いを、ことさら時流に便乗しての自己韜晦や銜いめかしたものとすゝいわれは全くないであろう。『春のいそぎ』の発売を目前にして、多少は高揚したところはあるにしても、その折の率直な感慨を記した一文と見てよいのであり、中で、『夏花』を「陰鬱なもの」と称し、第三詩集を、「いい出来の方」と自己評価している点に注目させられる。

今日、詩人伊東静雄の名で称揚され問題にされるのは、先ず『わがひとに与ふる哀歌』であり、単独の作としては『夏花』中の「いかなれば」「八月の石にすがりて」「水中花」等の幾篇であるのが通例になつてゐるようだ。詩集としては処女詩集を第一に挙げながら、代表作ということになれば、『夏花』から選択する向きも少なくはないのである。そうした通弊からするなら、詩人本人のこの意義付けはやや意外な感をもたらしさないでは置かない。もとより、いつの時代にあつても、作品の鑑賞および評価は同時代あるいは後代の読者なり研究者の手に全面的にゆだねる他は

ない。いわゆる文学史上の評価・位置付けにあって、作者自身の思い入れや主張を先ず優先しなければならぬいわれはないのであるが、ただし後代の評価なるものが、その時代の通弊にとらわれた紋切型になりやすいこともまた事実である。世に言う〈反戦詩〉でなければ鼻からその価値を認めないといった式の臆断が、伊東静雄の詩境から乖離したものであるのは間違いない。

伊東静雄は、もとより〈反戦〉を唱えはしなかった。と同時に、自らは前線に立つことなく徒らに戦意を高揚し、他人ごとのように若者を戦闘へと指喚するような詩句を、半句とて吐いてはいなかった。『わがひとに与ふる哀歌』から『夏花』へ、一貫して己れの心というよりは魂の深处での、熾烈という他はない孤独な闘いを敢行してきた詩人が、その詩作の源泉である日本語の唯一の母体としての日本人ならびに日本国を挙げての戦争という事態に直面し、詩人としてこれにいかにか誠実に応えようとしたか——応えないではいられなかったかが問題なのである。

あの「詩集春のいそぎ自序」の書き出しにあった、「大詔を拝し」云々の典故とも言うべき、昭和十七年『コギト』一月号に発表された「大詔」と題する一篇は、簡明なものであった。

昭和十六年十二月八日

何といふ日であつたらう

清しさのおもひ極まり

宮城を遥拝すれば

われらこゝろ尽く

——誰か涙をとどめ得たらう

伊東静雄は、気負い立ってはいないし、激してもいない。かといって、茫然自失しているわけではなかった。二行目が明示しているように、何とも形容できない心の動きの渦中に身をひたしながら、ただやがてそこから「清しさの

おもひ」のみがきわまってくるのを、見届けていたのであった。そのきわみで、詩人は自ずから宮城を遥拝せずには居られなくなり、そして涙の流れるのをとどめようもなかった、といった趣きである。単純明解に過ぎるかのようなこの心の動向が、掛け値のないその時その日の詩人のものであったろうことは、「述懐」一篇の冒頭に照らしてみても間違いないであろう。

「述懐」の初出は不明ながら、詞書に「大詔奉戴一周年に当りてひとの需むるまゝに」とあるから、詩作の時期は明らかである。その折にも詩人はやはり、こう記していた。すなわち「千早振神代にぞきく／かの天の岩戸びらきを／さながらに／大詔おほみこと／すがしさに得堪へで泣きて／いただきし朝あしたをいかで／忘れ得む」

「大詔を拝し」た日の詩人の感慨は、ついに「清しさ」の一言に尽きるのである。しかもそれは、何やら鬱屈し停滞していた自分の思いが、一挙に晴らされ解放されて、きれいさっぱりとした心地良さに充足したというありさまに帰着する性質のものではない。「大詔」の結びが、〈われは涙をとどめられなかつた〉でも、また〈われらはことごとく涙を禁じ得なかつた〉でもなく、「われら尽く／誰か涙をとどめ得たらう」と記されていたのを思い返そう。

簡明直截な一篇にあって、この結びに微妙な陰影がたたえられていると見るのは、うがち過ぎであるうか。〈われは——〉と一気に言い終えるなら、それは自分の実感の単純な吐露である。また〈われら——〉と切り切るとすれば、性急に概念化し一般化し過ぎた空疎な断言の響きともなりかねない。「われら尽く」と言い起こしながら、ふと言いよどみ、一呼吸を置いて「誰か涙を」と言い返したところに、詩人の心情の動きの機微を感じないではいられない。実に瑣細なことのようなが、この相違こそが、誠実さという問題においては決定的と言える意味をもっていると思われるのである。「誰か涙をとどめ得たらう」との言い方には、他人に対する強制や独断からする決定論めいた一般化の色合いが、後退しようとする響きがある。代って立ち現われてくるのが、「われ」の一入の思い入れであり、そうと信じようとする祈りにも似た願望である。

先行する二詩集において主調をなしていたのは、「われ」の孤独と悲哀であり、理念としての「わがひと」を求めたの「われら」という世界の構築であった。『春のいそぎ』での「われら」が、「われ」と「わがひと」とのそれではないのは明らかである。一途に「われ」から発想していた詩想が、ここで、「われら」との共通感覚のうちに溶け込もうとして行くのを見る思いがする。それは、「われ」が無に帰して、不得要領な「われら」にのみ込まれてしまうということではない。〈私〉が確かに感得した〈公〉なるものに、「われ」を傾注しようとする意志の発露なのである。

「われら尽く」——だが、他人の心のありかを、どうして知り得よう。ひるがえって詩人は、「誰か涙をとどめ得たらう」との思いにかけて、己れの涙が自分一個のものではなく、「わがひと」に限るわけでもなく、人びとに通い合うものであることを信じ祈ろうとする。ここでの「われら」が、「われ」がそこで誕生し育まれた〈言葉〉を共有し、「千早振神代にぞきく／かの天の岩戸びらきを」との神話を分かち合っている意味での一体感を表明したものであるのは間違いない。日本語という母国語によって、わが心と「わがひと」とを詠じて来た詩人に、「古き師と少なき友」(「わがひとに与ふる哀歌」献辞)の境を越えた、言語共同体・神話的祖型の生成過程としての〈公〉たる〈国〉なるものが、確かな手応えをもって立ち現われて来たと言えよう。詩集の巻頭に配された一篇「わがうたさへや」は、その認識によって立つ詩人の、つましい覚悟を詠じた作に他ならない。

おほいなる 神のふるきみくにに

いまあらた

大いなる戦ひとうたのとき

酣にして

神讚はむる

くにたみの高き諸声もろこゑ

そのこゑにまじればあはれ

浅茅がもとの虫の音の

わがうたさへや

あなをかし けふの日の忝なさは

あくまでも草莽との意識によりながら、「あはれ」なる「わがうた」が、しかし「大いなる」うたに交って、微かにも「をかし」と言える響きをかなでることを、伊東静雄は願ったのである。ここには実直な思い入れはあっても、他を煽動しようとする驕り昂ぶりはまるで見られない。あの「自序」で、伴林光平の一首「たが宿の春のいそぎかすみ売の重荷に添へし梅の一枝」を引照し、詩集題名の由来を記した思いも、また同様な趣きであった。「たが宿の」の一首には、はるかに『万葉集』のあの著名な「我がやどのいささむらたけ吹く風のかそげきこの夕かも」が反響しているようだ。だが伊東静雄は、「我がやど」の寂しさを歌うのではなく、「己れの歌もせめて」「すみ売の重荷に添へし梅の一枝」のごとく「たが宿の春のいそぎ」になれかしと祈念したのである。

山里で炭を焼き、重荷を負って街に出てはたつきとしている炭売りの姿。未だ春の気配は感じられず、寒さが身に沁みる。だが、力の限り背負った炭の荷に、一枝の白梅が添えられている。あるいは山里でつぼみを見出した炭売りの、誰か町人へのせめてもの心やりなのだろうか。そう言えば、暦ではもうすぐ初春を迎えようとしているのだから。そんな気味合いの、伴林光平の一首である。詩人は炭売りに自らを擬し、日毎の「活計」「夕映」「反響」所収の重荷にふと添えられた「梅花一枝」に、「大いなる戦ひとうたのとき」における、「己が詩の意味を求めようとする。」「自序」での「大東亜の春の設け」が、いわゆる〈大東亜共栄〉の理想実現のときへの用意といった意味合いを含んでいるのは、間違いあるまい。「わがうたさへや」での「大いなる戦ひ」にも、そのためのものとの付会がないとは言いい切れない。ただしこれ以外でも、各作品では「大東亜」といった言い方はなされていない。その点で「自序」

での用例は例外的なものであり、これをもって伊東静雄が〈大東亜共栄〉思想あるいは政治政策への同調者であったとするのは短絡に過ぎよう。

「大いなる戦ひ」の語法は、一行目「おほいなる 神のふるきみくにに」の冒頭の反復と見る方が適切であり、その語感はいしろあの『わがひとに与ふる哀歌』中の「行つて お前のその憂愁の深さのほどに」の書き起こし「大いなる鶴夜のみ空を翔り」に通じている。「わがうたさへや」一篇の眼目は、端的に「おほいなる」と詩人が感得したものと、卑少な「わがうた」との単純な対比にある。しかもその「わがうた」が卑小であるから無価値であるわけではなく、「おほいなる」ものと結ばれることにより、炭荷の梅花一枝にも似た、「あはれ」にもまた「をかし」との風情ある味わいを持ち得ることの発見であった。そして詩人は率直に、そうした「とき」に回合できたのを、「忝なさ」との念いをこめて受けとめていたのであった。

五

国いのる熱き血潮は

をとめ 汝が為にもぞうつ

汝^{なれ}見むと来し

この山踏みならね

汝^{なれ}見で

雪匂ふ汝^なが赤ら頬見で

いかで過ぎめや

あしびきの阿蘇を消しつづ

雪しきる久住くじゆうの山

面影のこぞの道とり

はせ下る妹いもが村指し

息つくと立ちて休らふ

しばしさへ心をどりの

力こめ石を投ぐれば

目にうつり遠きしじまの

谷の木の梢にみだれ

せつなくも上げし吹雪や

「久住の歌」と題された一篇である。この作には、入隊を目前にした若い友人からの手紙を引照した、長文にわたる詞書が付けられている。初出は不明だが、手紙の内容が、十二月八日の朝を久住山上で迎えた折のことを告げたものであるから、執筆時期も自ずと限定される。「大詔奉戴一周年に当りて」と詞書されたあの「述懐」よりは後の、しかしさほどの時を経てはいない頃の作であるに違いない。数人の友と、八日の早暁「雪の飛ぶ頂上で、宮城を遥拝して君が代を歌ひ、聖寿万歳を高らかに唱へた」のち、ただ一人「去年の夏のあの村を指して、一気に雪の久住を走り下った」と記す手紙を読み、それが「齎した感情に、わがうたつた歌。」とされる一篇である。

詩題「久住の歌」の由来となった久住は実在の山名のようにだが、その音読みからする掛け言葉の効果も暗にもたせ

られているようだ。もっとも、例えば忠ならんと欲すれば孝ならずといった風の、絶対的矛盾にぶち当たったの苦しみ、あるいは〈公〉のために私情を去るつらさといったことが主題である、と言うのではない。手紙が伊東静雄にもたらし「感情」には、そうした〈苦渋〉の色があったかもしれない。が、詩人がそれを一篇の詩に詠いあげようとしたとき、「久住」はその音読を超えて、むしろ字面にひそかに通う、人間の、わけても青年の〈永く久しい〉久遠の性としての心情のありかを想察する色合いを濃くしたものとなった感が深い。

「国いのる熱き血潮」と「をとめ」に向かつて高鳴り脈搏つ鼓動とが、分裂することなく一つとなる至純な生のありようを、詩人はその若い友の書簡文中から救い取ろうとしているようだ。冒頭の二行に、「汝を見で」と受けて更に「汝が赤ら頬見で」と反復強調し、「いかで過ぎめや」ととめた語調に、この間の心情の表現の巧みさが凝縮されている。〈だが〉とか〈しかし〉といった接続詞を用いないことによって、論理では汲み尽くせない、いわば理屈を超えた心の動きの真实性とでも言うべきものを、如実に表わそうとしているのである。かつて伊東静雄が、「あるひは」(「わがひとに与ふる哀歌」)行つて お前のその憂愁の深さのほどに「そして」「でない」と(「田舎道にて」といった、抒情詩にはおよそ似合わないとも見られる接続言を多用していたことを思い合わせるなら、ここでのこの語法は一人意味あるものに見えてくるのである。

一篇はこののち、一息に久住の山を下る道行きを詠いあげ、やがて「せつなくも上げ吹雪や」とおさめられている。せつなくも、しかしだからこそ清々しい心情の躍動を、詩人は己が心の丈をこらして、立ち現わそうと努めている。こうした作品に、当人は戦場の第一線に赴かない詩人の気軽さや無責任さを指摘することに、何の意味があるだろうか。一篇にはもとより、「清しさ」との語は用いられてはいない。ただし、あの「大詔」で表明された「清しさのおもひ」が、具体的にどのようなものであったかを想察する手懸りになるものが、ここには詠じられていると見てよ

いであろう。それはおそらく、自分一人の、心理学的な心の動向の一つではなかった。一通の手紙によってさえ、その書き手の心の真実性に通い合い、共鳴しないではおかないような、純粹無難な何かある心情と魂の発動する始源の場のありかのようなのである。

それは同時に、ある一定の信条なりを、何らかの標語に託して、声高に主張する行き方ともやはり異質なのであった。「をとめ 汝が為にもぞうつ」血潮は、これをへたわやめぶりへを否定したへますらをぶりへの真骨頂を表現したものと称して、片付けるわけにはいかないであろう。例えば、昭和十七年『文芸文化』三月号に発表された「春の雪」を読むとき、そうした区分けや評語が、やはり空しい響きでしかないことを、感じないではいられないのである。

みささぎにふるはるの雪

枝透きてあかるき木々に

つもるともえせぬけはひは

なく声のけさはきこえず

まなこ閉ぢ百るむ鳥の

しづかなるはねにかつ消え

ながめるしわれが想ひに

下草のしめりもかすか

春来むとゆきふるあした

この作のみを一瞥した限りでは、これと違って取り立てて問題とするまでもない、端正ながら力動感にとぼしい叙

景詩と見做されてしまうかもしれない。が、多少とも注意深く味読し、さらに詩集『春のいそぎ』の中にこれが占位していることを思うなら、一篇は、叙景詩でも抒情詩でもなく、つつましくも独自の詩的世界を構成した作であることに、気がかされるであろう。なおここに、例によって、万葉から古今集、あるいは詩人が大学の卒業論文とした正岡子規の流れをくむ島木赤彦さらには中原中也に至るまでの、様々な作のあえかな反響を指摘することは可能だが、そうした詮索にかかずらうより、一篇そのものを読む方が大切なのは言うまでもあるまい。

各聯三行からなる三聯構成に、一篇は整えられている。この成稿を得るまでに伊東静雄が苦心したさまは、わずかに残された当時の断片的な日記、その一月二十七日付の記録にうかがえる。すなわち、「二十七日 二日前より風邪にて臥床中なりしまき子熱ひきしが、身体いまだだるげなり。われも気分わるし、早くいぬ。／みささぎにふるはるのゆき 以下詩なかなか成らず。」として、以下、三通りの草稿を記している。そしてこの日の記録の末尾に、「偶感」と題し「かげぐさの なもなきはなに なをいひし／むかしのひとの あはれをぞ おもふ」と書きとどめている。この「偶感」の所感は、『春のいそぎ』中の「春浅き」(十八年「四季」五月号)を連想させないではおかない。「あゝ暗と まみひそめ／をさなきもの／室に入りくる／いつ暮れし／机のほとり／ひぢづきてわれ幾刻をありけむ／ひとりして摘みけりと／ほこりがほ子が差しいだす／あはれ野の草の一握り／その花の名をいへといふなり／わが子よかの野の上は／なほひかりありしや／(略)名をいへと汝はせがめど／いかにせむ／ちちは知らざり／すべなしや／わが子よ さなりこは／しろ花 黄い花とぞいふ／(後略)」と。これによれば、「なもなきはなに なをいひし／むかしのひと」とはまた、他ならない詩人本人でもあったことは確かであろう。その心持ちの「あはれをぞ おもふ」感慨のうちで、しかも病気の長女を気遣い、自身も「気分わるし、早くいぬ」状態にあって、「春の雪」の推敲を重ねていたのであった。

一篇の発想の主眼が、第一行「みささぎにふるはるの雪」にあったことは、これだけは推敲過程にあって、漢字の

用法に違いはあるものの語句としては終始一貫していたことに明らかである。この初行は直ちに、『夏花』の「夢からさめて」のあの「硝子窓の向ふに、あゝ今夜も耳原御陵の丘の斜面で／火が燃えてゐる。そして それを見てゐるわたしの胸が／何故とも知らずひどく動悸うつつを感じずる。」「あゝこのわたしの夢を覚したのは、さうだ、あの怪しく猥めく／御陵みさきの夜鳥の叫びではなかつたのだ。」との一節を想起させる。ただし「春の雪」では、「つもるともえせぬけはひ」のあかるい朝の静謐さのみが際立ち、「火」も見えず「怪しく猥めく」「夜鳥の叫び」も聞こえては来ない。

注目すべきはこの発端の二行が、描写でも印象の表明でもなく、端的な提示の一文だという点である。へはるの雪は、でも〈雪の〉でもなく、体言止めにされていることよって、意味上は後続の全文に懸かりながら、しかし形式的な主語になるわけではなく自立した一行をなしている。そこで提示されているのは、死というものの明確な形である墓、しかも単なるそれではなく格別な意味をもつ天皇の御陵にふる「春の雪」という取り合わせである。春と雪とが、元来相反するものごとの組合せであるのは言うまでもない。「みささぎ」と「はる」と「雪」とが一体となつた取り合わせのあり方を明示することに、初行の主眼があつたと見られる。

これに対して、あかるさの強調された二行目は、詩人が現に見ているものの描写であり、三行目は視覚を通して、しかし直かに見ているのではなく、全身で感じ取っていることからの表白のようだが、その表白は、完了することなく断ち切られてしまう。詩人が感取しているのは、「けはひ」としか言えないような何かである。ではその「つもるともえせぬけはひは」何でありどうであろうというのか、当然言及のあるべきところだが、第一聯は「けはひは」で唐突に終わる。へ——もへ……も記さない単純明解な聯末のあり方は、思わせぶりとか余韻を残すというのではなく、いっそ言葉をつつしむといつた詩人の意志の現われと見るべきではないか。

第二聯の一行目は「きこえず」との否定形ながら、実情の描写と云つてよい。ところが二・三行目では変化して、

まったくの想像を詠っている。みささぎに生えた木々の枝々に数多くとまっているだろう鳥たち。まなこを閉じしずかに休らっているその羽に、春の雪はふりかかり、そして消えてゆく。鳥たちは凍え付いているのも氣息奄奄としているのもあるまい。しかしながら鳴き声一つ立てることなく、春の雪に耐えているであろうその「しづかなる」姿には、あたかも生と死のはざまの静寂に身をひたきったような、清しさの極まりがあるかのようだ。

第三聯一行目の「ながめるしわれが思ひに」は、草稿で、初め「ながめるしわれのおもひに下草の（略）」とあったのが「ながめるしわれのおもひや／下草の」と推敲された跡が残っている。成稿で結局、改行はしたものの初めの表現により近い「われが思ひに」となったわけである。この選択に働いていた意識が、自分の思いと「下草のしめり」と「春の雪」とを一体化しようとする点にあったことは、間違いないだろう。「われのおもひや」では、この一行だけが切り離され独立して、「下草の」以下は単なる描写になってしまふからである。

「ながめるし」はもちろん、ただ単に見ていたというのとは異なる。みささぎにふる春の雪を見て、言い知れない「けはひ」を感じ、肉眼では見えるわけもない鳥たちの姿を、しかしその「しづかなるはね」のありさままで如実に観察することまでも含めて、すなわち全身全霊をあげて感じ思い入るありさまを、言っているのである。

そのように永い間ながめていた「われが想ひに／下草のしめりもかすか／春来むとゆきふるあした」と一篇は結ばれていた。その己れの想いに、正に照応し相呼応するかのような「下草のしめり」を、詩人は確かめる。「下草」が何を意味しているかは、今さら言うまでもない。「下草のしめり」は、詩人の胸を濡らしてやまないものに他ならぬのだから。だが、その「しめり」は決して溢れ流れ出るようなものではない。今朝の雪は、冬への逆戻りではなく、春の到来を告げ知らせようとして降っているのであり、いわばこれもまたあの一輪の梅花にも似た「春のいそぎ」としての雪なのであるから——と。

詩人はもちろん、そんな書き方などしてはいない。伊東静雄はこのとき「かげぐさの なもなきはなに なをいひ

しむかしのひとの あはれをぞ おもふ」念いを深く秘めて、言葉をつつしみつつしみつつ、一篇を綴っているのである。表現は凝縮され、簡潔この上ないまでに整えられている。が、だからその詩藻が単純平板だということにはならない。陰影は濃く深いのであって、それを浮きばりにするためには、多少の蛇足も必要だと考えたに過ぎない。少なくともこのように見てくるならば、「春の雪」一篇が、春のいそぎとして炭売りの重荷に添えられた梅の一枝の中でも、ことのほかつつましくも清しい香りを放つ一輪の花であることは、間違いないであろう。そしてこのつつましさに、はるかにあの「各自の苦しみを我慢して公の仕事をして行く、人間のいとほしさをしみじみと感ずるのです。」(池田宛書簡)と述べていた詩人の言葉が、今更のように響いてくるのを覚えないではいられないのであり、更にはそれが、はるかに『万葉集』四千五百首の掉尾を飾る、大伴家持の「新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事」との一首にこめた深い祈念と、みごとに共鳴しているさまを思い返させてやまないのである。